2021年『落窪物語』現代語訳

次の文章は『落窪物語』の一節である。落窪の君は源中納言の娘で、高貴な実母とは死別し、継母にいじめられて育ったが、ひそかに道頼と結婚して引き取られて、幸福に暮らしている。少将だった道頼は今では中納言に昇進し、衛門督を兼任している。以下は、道頼が継母たちに報復する場面である。

かくて、「今年の賀茂の祭、いとをかしからむ」と言へば、衛門督の殿、「ア さうざうしきに、御達に物見せむ」とて、かねてより御車新しく調じ、人々の装束ども賜びて、「よろしうせよ」とて、いそぎて、その日になりて、一条の大路の打杭打たせ給へれば、「今は」と言へども、イ 誰ばかりかは取らむと思して、のどかに出で給ふ。

こうして、　「今年の葵祭は、　とても趣があるだろう」と（道頼の従者が）言うと、衛門督殿（＝道頼）は、「（見物に行かないのは）物足りないので、女房達に（葵祭を）見物させよう」と言って、予め　御牛車を　新調し、　（連れていく）人々の　衣装をお与えになって、「（祭見物の支度を見た目が）悪くないようにしなさい」と仰って、（見物の）準備をして、当日になって、一条大路に（場所取りのための）打杭を打たせなさったので、（道頼の従者が）「今は（もう出かける時間です）」と言うけれども、「（急がなくとも）どれほどの者が見物場所を横取りするだろうか。いや、誰もするまい」とお思いになって、のんびりとお出かけになる。

御車五つばかり、大人二十人、二つは、童四人、下仕四人乗りたり。男君具し給へば、御前、四位五位、いと多かり。弟の侍従なりしは今は少将、童におはせしは兵衛佐、ウ「もろともに見む」と聞こえ給ひければ、皆

御牛車五輌ほどに　大人が二十人、　二輌には、　童が四人と　下仕えが四人乗っている。　道頼がお連れになっているので、御先導には、四位・五位の者が、とても多い。　道頼の弟で、侍従だった人は今では少将に、童でいらっしゃった人は兵衛佐に（それぞれ昇進して いたが）、「（兄である道頼と）一緒に見よう」と申し上げなさったので、　（弟たちとその従者）皆が

東大合格 敬天塾

おはしたりける車どもさへ添はりたれば、二十あまり
乗っていらっしゃった車までもが加わったので、　二十輌余り（の牛車）が
引き続きて、皆、次第どもに立ちにけりと見おはするに、
続いて、　「皆、身分の順に整然と（見物場所に）立ち並んだなぁ」と、（道頼が）ご覧になっていると、
わが杭したる所の向かひに、古めかしき檳榔毛一つ、網代
自分達が杭を打った所の向かい側に、　古めかしい檳榔毛（びりょうげ）の牛車が一輌と、網代（あじろ）
一つ立てり。
車が一台停まっている。
御車立つるに、「男車の交じらひも、疎き人にはあら
お車を停める際、　（道頼が）「男車の配置も、　疎遠な人ではない
で、親しう立て合はせて、見渡しの北南に立てよ」と
（ので）、親しく面と向かって停めて、　視界に入る北側と南側に停めよ」と
のたまへば、「この向かひなる車、少し引き遣らせよ。御車
おっしゃるので、　「この向かいにある車、　少し移動させなさい。　お車を
立てさせむ」と言ふに、ェしふねがりて聞かぬに、「誰が車
停めさせるつもりだ」と（道頼の従者が）言うと、（相手は）強情な様子で聞き入れないので、（道頼が）「誰の車
ぞ」と問はせ給ふに、「源中納言殿」と申せば、君、
だ」と　尋ね（させ）なさると、　「源中納言殿（の車です）」と申し上げるので、　道頼が
「中納言のにもあれ、大納言にてもあれ、かばかり多かる
「中納言の牛車であっても、　大納言の牛車であっても、　これほど（停める場所が他にも）多く
所に、いかでこの打杭ありと見ながらは立てつるぞ。少し
ある所に、どうして　『この打杭がある』と目にしながら　（牛車を）停めたのか。　少し
引き遣らせよ」とのたまはすれば、雑色ども寄りて車に
移動させよ」と　おっしゃるので、　（道頼側の）雑色たちが近づいて（源中納言家の）牛車に
手をかくれば、車の人出で来て、「など、また真人たちの
手をかけると、　（源中納言の）車の人が出て来て、　「どうして、　またあなたたちは
かうする。いたう逸る雑色かな。豪家だつるわが殿も
こんなことをするのか。ひどく勇み立った雑色だなぁ。　権門らしく振舞う　自分たちの主人も、

中納言におはしますや。一条の大路も皆領じ給ふべきか。強法す」と笑ふ。「西東、斎院もおぢて、避き道しておはすべかなるは」と、口悪しき男また言へば、「同じものと、殿を一つ口にな言ひそ」などいさかひて、えとみに引き遣らねば、男君たちの御車ども、まだえ立てず。君、御前の人、左衛門の蔵人を召して、「かれ、行ひて、少し遠くなせ」とのたまへば、近く寄りて、ただ引きに引き遣らす。男ども少なくて、えふと引きとどめず。御前、三四人ありけれど、「益なし。この度、いさかひしつべかめり。ただ今の太政大臣の尻は蹴るとも、この殿の牛飼ひに手触れてむや」と言ひて、人の家の門に入りて立てり。目をはつかに見出して見る。

少し早う恐ろしきものに世に思はれ給へれど、実の御心は、いとなつかしう、のどかになむおはしける。

（こちらと同じ）中納言でいらっしゃるのではないか。一条大路も　すべてご領有なさるおつもりか。

横暴だ」　と笑う。「西から東へ、（葵祭で一条大路をお通りになる）斎院も（あなたたちの横暴さに）恐れて、（一条大路を）避けた道を選んでお通りになるに違いないそうだ」と、口の悪い男がまた言うと、「同じもの（＝中納言）と、（我々の）主人を（お前達の主人と）一緒くたに言うな」など口論をして、すぐに

移動させられないので、　道頼たちの御牛車が、

御先導の人である　左衛門の蔵人をお呼びになり、

「あれを、　指図して、　少し

遠くに移動させろ」とおっしゃるので、（源中納言の車に）近寄って、　無理矢理に移動させる。

（源中納言側は）従者たちが少なくて、簡単に止めさせられない。　（源中納言側の）御先導は

三、西人いたけれども、　「（逆らうのは）無益だ。　今回の件は、　きっと（大きな）口論となってしまい

そうだ。　ともかく、今の太政大臣の　尻を蹴ったとしても、　こちらの御主人の

牛飼いに手を触れることはできるだろうか、いや、できない」と言って、（牛車から離れて、）よその家の門に入って

立っている。　目をわずかに出して（大路を）見ている。

（道頼はこのエピソードによって）少し気が短く恐ろしい者だと世間では思われてなさっているけれども、

実際の御心は、　とても親しみやすく、　穏やかでいらっしゃった。